

清水一行 情報銘柄

一行 情報銘柄

FOR MATION



N

IN

n

情報銘柄

1969年2月8日 第1刷発行

著 者 清水一行

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(942)1111(大代表)

振替 東京 3930

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 有限会社 大光堂

定 価 350円

Printed in Japan © Ikkō Shimizu 1969

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

目次

新車――ニュー・モデル

5

情報銘柄

75

零の発色

143

社名の葬送

193

装
幀

片
岡
眞
太
郎

情報銘柄

新

車
—
ニ
ュ
ー
・
モ
デ
ル

一

乱暴なノックで、返事も確かめずに部屋へ入ってきた女中は、粗末なテーブルにお盆のお茶を並べ、寒そうな煤けた顔で石田康三を見上げた。

「どうします、御休憩？」

石田は下唇を突き出すようにしてうなずいた。

「一時間七百円」

中腰のまま女中が言う。その言葉で石田は章子に視線を返すと、章子は無言でハンドバッグを引き寄せた。顔をそむけて石田は煙草をくわえる。

「お風呂はあるかしら……」

五百円札の上に百円貨を二枚並べ、ピチッと財布の口金を鳴らしながら章子が聞いた。

「お時間でしょ」

「泊りでないと駄目なの」

「御休憩の場合、百円頂くことになっているんですが」

女中が無愛想に言った。六畳の部屋には形だけの床の間に向かって、しめっぱい蒲団が敷かれていて、暖房器具はなにもなかった。

「ね、どうする」

「寒い、風呂はどうでもいいよ」

「じゃ、よすわ」

章子はあっさりと女中に断った。仏頂面で女中は盆の上に金をのせて立つ。

「お風呂ぐらい入ったって、たいしたことないのに」

部屋を出た女中が後手に戸を閉めるのを見定めてから、鏡台の前に坐り直した章子が言う。それには答えず石田は壁のハンガーを取り、背広ごと一緒にオーバーを脱いだ。

「髪をこわしちゃうのか」

鏡台の前でピンを外す章子に石田が聞いた。

「だって気になって仕様がなないんだもの」

帰りに結い直すのが大変じゃないかと言いかけて、石田は肌着の上に寝間着を羽織った。

「駄目、シャツとも引き」

「しかし……」

「厭よ、すぐ暖かくなる」

口調は厳しかったが、章子の言葉には甘える響があつた。石田は体をすくめるようにして、メリヤスのシャツを脱いだ。

「先に蒲田へ入る方が損だな」

「いますぐよ。いいでしょ」

鏡の中で章子が微かに笑った。

従妹といっても章子は妻の関係の者だったから、石田との血のつながりはなかった。勤務先は神田のヘモーター・クラブという月刊雑誌社である。

以前からアルバイトでヘモーター・クラブへ寄稿していた、アジア自動車生産企画部第一課長、石田康三の紹介だった。

寄稿といっても、毎月一ページもののコラムを担当していただけだから、原稿料は一ヵ月二、三千円、金額としては知れたもの。だが、このての副収入が二、三口もあるとそれだけでなんとか日常の小遣い銭分は賄えるのだった。

「今日は章子がスポンサーだから……」

「そうよ、このところずっとわたしだわ」

章子は屈託なく言った。

石田のアジア自動車入社は昭和二十六年、勤続十六年で本給八万四千円に、四千五百円の家族手当がついたが、税金とか失業保険、厚生年金などでごっそり控除され、実際の手取りは七万円程度だった。

ところがちょうど一年前に会社の住宅資金に当たり、三百万円近い融資を受け、二割の自己資金を加えて、埼玉県の浦和に十八坪の家を新築してからは、住宅補助金を別にして、七万円前後

のサラリーから毎月八千五百円、ボーナス時各八万円ずつ返済してゆかなければならなくなり、二人の子供を加えた四人家族のやりくりは精一杯で、小遣いは完全に副収入に頼るしかなかった。

そのため、アルバイトがうまくゆかなかったり、副収入の入金が予定より遅れたりすると、忽ち煙草銭にもこと欠くことがあり、十日に一度の割で章子と会う旅館代を、彼女に頼らなければならぬことが多くなった。

「そのうち家の借金でも片がついたら、章子にどこか温泉でもおごるさ」

「あら、厭よそんなの、康三さんの家の借金って、十年かかるんでしょ、わたし十年もこのまま康三さんときあつてなくちゃならないの」

「いや、あと九年だ」

「あと九年たったら、わたし三十二歳よ」

「しかし……、じゃどうする」

「そのうち結婚するわよ」

粗末な薄い蒲団にもぐりこんだ石田を振り向いて、当然でしょというように章子が言った。

三十九歳の石田と二十三歳の章子では十六歳の差がある。義理の従妹という馴れから、どちらが誘ったというわけでもなく、章子が神田のヘモーター・クラブへ勤めはじめた二年前、体の関係ができてしまった。妻と同様眼が大きく瘦せた細面だったが、章子の方が白い肌理が透き通るように美しかった。

「ぼくを捨てて結婚する気なの」

「あら、だって康三さんにはちゃんと種子さんという奥さんがついているじゃない」

「種子はだって……」

「だってなあに」

続ける言葉に詰まって石田は視線を上げた。夜会風に結っていた髪を肩まで梳すいて、鏡台の前を立った章子は、バイオレットのカーデガンを脱いだ。

「種子さんと別れてなんて、わたし一言も言っていないのよ。そんなことしたら健一ちゃんや美子ちゃんの二人の子供が可哀想ですものね。そのうちわたしだって結婚するっていっただけ」

含む微笑を石田になげ、章子はセーターも脱ぎ、寝間着を羽織りながらスリッパの肩掛けを下すと、ブラジャーを取った。

「そんなことを考えているなんて知らなかったな」

石田が無然とした思いでつぶやいた時、部屋の電気を消した章子は羽織っていた寝間着を捨て、白い肌を踊らせて蒲団へ飛びこんだ。

「ね、こんな話もうお終いよ」

磨き上げた石のように、章子の肌は冷たかった。それでも気を取り直した石田は腕を廻して華奢な章子の体を胸に抱きこむ。細い子供の体のようなウエストのくびれ、それでも妻の種子と較べると、張りのある乳房が泳ぐように息吹いていた。

しばらくして章子は鼻を鳴らし、燃える眸ひとみで石田を見上げた。

「このままでいいじゃないか」

「厭、ねえ……」

「寒くて」

「寒くなんか無い、あったかいわよ」

「じゃ、もすこしあったまってるから」

「駄目、駄目よ」

章子は足をばたつかせて石田にせがんだ。苦笑しながら石田は、左手をのばして枕スタンドをまさぐり、スイッチを引くと、俄かに章子の白い顔が小さな灯りに浮かび上がった。石田は渋々蒲団を這い出し「さ」と、あぐらをかく。章子が横坐りにそのあぐらの中に腰を落とすと、「ウ！」と言いながら石田の首に腕を廻した。

章子はいつもそのポーズでの抱擁を求めた。石田が細い体に廻した腕で章子を支えようと、章子は唇を開き加減に接吻を求める。唇だけではなく、頬や鼻筋、眼窩がんかの周囲や耳それに首と、強く体を密着させたまま燃えてゆく章子のリズムに合わせて、石田は静かに舌尖と唇の愛撫をはじめた。忽ち章子の呼吸が乱れる。

こういう時、石田がゆっくりとした一定のテンポを崩したり、乱暴に唇を這わせたりすると、すぐに章子は醒さめてしまう。まして抱きかかえた腕の力が少しでも緩むと、陶醉感が中断されるという嫌った。眼窩から唇へ戻り、唇から頬へ、そして再び唇へ、やがて石田は、章子の耳朶みみたぶを自分の唇の間にはさみこんだ。その瞬間、章子の全身が激しく痙攣した。

反応を確かめてから石田は熱い息を章子の鼓膜の奥へ吹きかける。動物のような絞り出す声で、忽ち章子は首筋をのけぞらせた。

「章子……」

声を殺したささやきで、石田は章子と呼んだ。

「章子、章子……」

呼んでおいて細いのだ首に、石田は舌の先端を微かに当てる。間歇的な痙攣が不気味なほど高まり、激しく歯をすり合せてあえぐと、途絶しそうな呼吸で「好き」と章子は言った。

そのとき石田は初めて抱いていた手の位置を変え、章子の高まりを中断させないように、添い寝をする仕草で床に横たえた。

自分以外の誰かと結婚して、章子はその男にも、この前戯と行為に至るまでの手順を要求するのだろうか……。そう思うとやりきれぬ嫉妬が石田の胸で煮える。

「章子、おい章子」

不意に石田は陶酔に浸ったままの章子の頬を、右手で叩くように打った。

「厭！ 下よ」

「本当に結婚したいのか、誰かいい人がいるのか」

「駄目、駄目じゃないよ」

「聞いているんだ、好きなボーイ・フレンドがいるのか」

霞んだ眸を開き、やがて章子が激しく石田を睨んだ。

「意地悪」

「十年なんて言わない。アルバイトを多くして、なんとか金をつくる。二人で旅行でもしようじゃないか。な、だからそんなこと言わないでくれ」

「その話はお終いつて言ったのに」

「気になって、これ以上抱けないんだ」

石田は懇願するように言った。章子は深く息を吸いこみ、再び眼を閉じると「もう言わないわ」と言いながら、石田の体に手を這わせ、思いきり握りしめた。

二

毎年十二月になると、大手の自動車メーカーは、競って翌年の生産計画の立案に着手する。この生産計画は月末ぎりぎりまでに成案を得て、年が改まった新春早々、大手メーカーの首脳は恒例の新年記者会見を開き、晴れがましい表情で、その年一年間の生産計画台数を発表するのだった。アジア自動車は、日本の二大自動車メーカーの一社だったから、新年に発表する生産計画は、その年一年間の日本の自動車産業の動向を見通す上で、各方面から注目され、それだけに慎重な作業が要求された。

生産企画室第一課長という石田康三の立場は、この生産計画立案の直接部門ではなかったが、それでも新車の開発やモデルチェンジ、マイナーチェンジを担当する立場から、生産計画策定とは密接な関係を持っていた。むしろ何台つくってどれだけ売るかというようなことは、その年に